

## 患者輸送部隊

—うすれゆく記憶の中から—

愛知県 水野 清次郎

はじめに

「可応欽」と言う人の名を、今どれ程の方が覚えておられるであろうか。私達の部隊は中支派遣軍「呂第六一三六部隊・患者輸送部・第九班」と言う隊長以下九十二人の小さな衛生部隊でありました。私達初年兵三十三人は昭和十八（一九四三）年八月、名古屋中部第二部隊に召集され、八月三十一日下関から朝鮮釜山へ渡り、大陸の漢口で初年兵教育を受け、引き続き上海の青葉部隊で衛生兵教育を受けました。

原隊である沙陽鎮へ帰隊途中に命令が変わり北支派遣軍となり、天津第一陸軍病院の指揮下に入り、天津がしばらくの間、根拠地になった訳です。

が、その時、我々部隊が入った宿舎とそれに付属していた広大な土地家屋は、当時支那南北軍総司令官であった敵方の大将可応欽の別邸であったのです。

終戦後、私が台湾省台中市の名刹宝寛寺住職の林綿東師のじつ懇を得て、幾十度と訪中する機会があったが、その宝寛寺の境内には二基の大きな碑が建てられてありました。

林綿東住職の説明によると昭和二十年夏の終戦時に台湾全土で戦病死した日本軍人軍属は二万人近くあり、それが引き取られる事もなく放置されたままであったが、亡くなった人に罪はないとその遺体を収容し茶毘に付した。その当時は日本は敵国である、そんな敵国人に必要なないと相当に強い反対運動があった時、この可応欽將軍が第一番に賛成され援助と協力を惜しまなかったそうです。

後日、その徳をたたえ日本軍人將兵の慰霊碑と可將軍の顕彰碑の二基を建立されたと言うことで

す。私はかつての大陸を思い感無量でありました。その後台中訪問の折には必ず宝覺寺の、この二基の碑に礼を捧げた次第です。

うすれ行く記憶の中から

こんな話！ 清江を登る！

私達の部隊は南京、奉天（瀋陽）間の病院列車による患者輸送の任務を解かれ、後日になって解った事ではありますが芷江大作戦参加のため揚子江を遡り、漢口を経て対岸の岳州から洞庭湖に至り、洞庭湖畔からサンパンに乗り込みました。サンパンはなかなか大きな帆船で、現地の船頭というのか舟子とでもいうのでしょうか、十人程も乗っております。

私達は部隊の持っている担架、衛生材料をはじめ軽機関銃、武器、弾薬などかなり沢山の物資を苦力クワリを使って船に積み込みました。洞庭湖と言う名はよく聞いておりましたが、実際に目にして見ますと一望千里、びっくりする程大きな湖であっ

たのです。夕方から曇り風も吹き始め湖上は荒れ模様でありました。大陸の夕暮れはおそく、朝明けは早いようでありました。

その頃から制空権はあちらさんに奪われ、昼の行動は制約され、部隊の移動などほとんど暗くなつてからの行動になってしまいました。

その時も日が暮れてからの出航でしたが時間が経つにつれて私達の乗った船の動揺はだんだんと激しく、大粒の雨も加わり一瞬息もつまりそうな様子でした。雨も風も痛い程吹き付け、荒波は渦を巻いて船は木の葉のように揺れ動きまわります。進んでいるのか押し流されているのか、サンパンの船頭達も大声で叫びながら暗い嵐の中を動きまわっております。船団もいつの間にかばらばらになつたようでした。水の上のことですから我々は何もできず、銃をしっかりと握り、吹き飛ばされないうように柱や船端のロープにしがみついているだけがいっぱいでした。

明け方になつても一向に風雨は衰えず、昼頃に

なつてようやく目的地に近づいたようでした。船は洞庭湖を突き切つて大河の流れに入っているようで、それが清江で、私達の部隊が上陸する地点が松蔭であつたのでした。けれどもその松蔭川岸を目の前にしながら、しばらくの間、船は接岸せず、揺れる波の上にとどまつておりました。

やがて、上陸開始の命令が出たのは二時か三時頃であつたと思います。その頃には、あれ程強かつた雨風もどうやらおさまつて、どんよりとした曇り空でした。上陸する前には、かなり遠くで雷のような「どーん！ どーん」と言う音と、それにまじつてカタ、カタ、カタと言う機関銃の音がしていました。この付近で戦闘が展開されているのだ！ と言う実感を得ました。街は歩く人の姿もなく、洪水の引いたあとのようにうす汚れていて、寒々としていました。捨て犬が二、三匹たわむれ、風が吹くと紙屑が舞い上がる様子で、戦禍の後のむなしさを感じる風景であつたことが記憶に残っています。

河岸に上がつて歩きながら軒の低い家々を覗きますと人影は全くなく、出入り口も戸は開いたままで、日本軍の攻撃に命からがら早々と逃げ去つたものと思われました。私は初年兵でありましたし、何事もよく解りませんでしたが、前線の傷病兵達を後方へ輸送するために清江をのぼつて行くのだと思つておりました。昨夜の大嵐の後でもあり、ここで二、三日の休養を取つてから行くことと思つていましたが、しばらくはここで任務につく事になつたようでした。

患者収容所として、何軒ものファンズを接收、簡単な病室、炊事場、物干場、河岸には船の発着場所などの設営で多忙でした。私は薬室勤務でしたので多少ましなファンズを探し、準備に掛かりました。運び込まれた隊医たいい箆しやうや医療梱包を解いて棚に並べました。医薬品の中、医箆には一千何百種類もの必要品や器具が収められ、その数の多い器具・薬品を覚え、使用後同じ場所に間違いない収納することには難儀しました。

私達が陣取ったファンズをはじめ住民達は、日本軍の素早い進軍であわてふためいて逃げ出したので、街中はひっそりとし、誰もいないと思っていたのですが、二、三日経ってから、どうも人が住んでいる気配がすると言います。近くに駐屯している輜重隊の人の話では、子供一人に老婆がおり伝染病患者のようであるから近寄らないほうがいい、とそんな噂が私達の所まで伝わってきました。

私は患者収容所開設のため器具・薬品などを早急に整備するため多忙で、そんなことに取り合っている暇もなかったのですが、何日か経ってもその者達が死んだと言うこともありませんでした。

そんなある日、少し暇があり、外へ出た時、ふと先頃の噂を思い出し、なんとなくその人達が住んでいるであろう所を、そーっと覗いて見たのです。うす暗い屋根裏の家具で囲んだ狭い所で、ひっそりとその者達は居ました。私の靴音にはっとして警戒の様子を見せて身構えましたが、私の

態度や表情に敵意がないと思ったのでしょうか、老婆は細い手を合わせて私を拝むのです。そして低い声で語り掛けてくるのですが、勿論言葉なんて私には解りません。しかし「今この児は死にかけている、何とかこのまま見逃してくれまいか、知らぬ顔をしていては貰えないか」と私にすがっている、そんな風に私には思えたのです。私は手を振って悪意のないことを伝えました。

笑顔を見せて少し近寄って見ますと、寝台に寝ている病人は十歳位の少年で、すっかり痩せ衰え息さええらそうで到底回復はおぼつかないとも思われる程衰弱しきっていました。両親は、日本軍が攻めて来ると言うので、重病の子供を連れて逃げて行く事ができず、心ならずも、この老婆に託して逃げに行ったのに違いありません。私はこの二人の身の上に哀れを感じました。子の病氣は赤痢ではないかと思いました。ちょうどポケットに「クレオソート丸」を持っていたものですから十粒程出して老婆の手の平に乗せてやりました。

「食事の度毎に一粒ずつ飲ませてやりなさい」と手振り身振りで教えてやったのです。それから私は誰にも話さずにこっそりと覗いたり、そんな事が二、三日続きました。

それから二カ月半経ちました。あれ程重症と思われた少年に天命があったのか、クレオソート丸が効いたのか、少年は少しずつ健康を取り戻して表に出て来るまでになったのです。その頃になると街の人々も少しずつ家に戻って来ました。私達の部隊を警戒しながらも、街の人達は胸に縫い付の山形のマークに緑色の兵科を表わす記章を見て、私達が衛生兵であることを知ったのかもしれませんが。「やくたいじん（薬大人）」と言うのです。

衛生隊は危害を加えないとでも思ったのか、それとも医薬を扱うと言うことで、ある程度の親しみを感じているのか、他部隊に比べてぐっと近寄り易かった事は事実です。ちょうどその頃、私達

は敵さんの爆撃に見舞われました。何日も降り続いていた雨が止み久しぶりの天気でありました。面白いことに雨が降ると敵さんは戦争はお休みでまずやって来ません。そんな中での久しぶりの天気でしたから患者も私達も一斉に洗濯をしてかなり広い物干し場に洗濯物を干し広げました。ほとんどの物が白い物ばかりですから空から見るとよく目についたと思います。

お昼に近い時間でした。かなり高い空を一機だけ飛行機が飛んで行きました。それがすぐ引き返して来ました。少し高度を下げた、と思った途端黒い物が一つ二つ落下して来たのです。私達の患者の收容所はその直撃を受けて一瞬のうち無惨にも飛び散りました。何軒かの家屋は粉碎、大地は深くえぐり取られ大きな穴があき一方、土が山のように盛り上がり、收容されていた多数の傷病兵がその中に埋もれてしまいました。それは一瞬の出来事だったので。

ちょうどその時私は、対岸の防疫給水部から戻

る小舟から岸へ上がった時でした。「爆音！ ばくおん！」と言う警戒の声は船の中から聞いておりましたから、敵の飛行機は目には入っておりませんでした。そして避難する防空壕を探しながら走っていたのです。飛行機から落とされた黒い塊を見た時、見付けた防空壕へ飛び込みました。耳をつんざく轟音と共に防空壕が波のように揺れ大地が沈んで行くように思いました。頭の上から土が流れ落ちて来て、息も止まる思いでありました。耳の中はしばらくの間がんと鳴り続けていたのです。爆撃の恐怖を知った一瞬でした。大きな被害を受けた初めての経験、それが松蔭であったのです。

収容されていた傷病兵の患者も何人かが亡くなりました。前線からサンパンで送られて来て、ここで一時休養し、また後方の岳州、漢口方面へ後送するのですが、ここで病状が悪化して休養中に亡くなる兵士もありました。そんな時には遺体を安置する別の部屋があつて、一晩中歩哨が立って

守るのです。敵の夜襲を受けないために灯火管制実施で真つ暗なんです。遺体安置所の部屋だけは灯火がともされていきました。そんな部屋も吹っ飛んでいきました。

私達の部隊が松蔭の街に入った時には、絶えず砲声が聞こえておりましたが、何日か経つとその砲声もまばらになりました。聞かなくなりました。それは敵が日本軍に押されて後退しそれだけ日本軍が前進して行ったのだと思います。戦前発行された大陸地図で松蔭と言う所を探して見ますと、松蔭県松蔭と出ていますからその付近の中心地であつたように思います。街全域が城壁で取り囲まれていないで、片方は清江に面し、反対側は丘陵に続いていきました。

城壁よりは出るなという注意がありましたので外へ出た事ありませんでしたが、上流より負傷兵を乗せたサンパンが一日か二日下つて来ないで少し暇があると城壁の所まで行って見ました。壊れかかった城壁から二、三步外へ出て見ますと、

遙かに丘陵と広い蓮池があり、見渡す限りの田圃が連なっていました。広い田圃には三々五々農作業をやっている人影がありました。そんな平和な風景を見ると、日本内地と同じだと、それが強い郷愁を誘うのです。

爆撃を受けたのは私達の部隊だけではなく、付近の住民達も同じで、かなり死傷者が出たようで、一時は騒然とした様子でした。私は一兵士でありますから何も解りませんが、被害を受けた住民の方からは度々助けを求め要請は有ったようで、二日程の後、部隊はそれに応える形で住民の負傷者達を受けるような場所を造りました。私は本当に良い事であったと今も心に残っているのです。

住民側は要請はしたものの初めのうちは、こわごわ、恐る恐るの様子でしたが、しばらくすると負傷者だけではなく頭が重いと下痢が止まらぬとか、そんな者まで来るようになりました。そんな時、部隊でも「軍務に支障のない限り支那民衆

との交流を緩和せよ」と言うおふれがあったように聞いております。支那民衆と友好を計るために特別部隊を創設し「無理のない程度ならよろしい、ただし物品等は受け取るべからず」と言うそんな文書も出たようでした。

ところが住民達は誠に律儀で、具合がよくなると必ずお礼にやってくるのです。どんなに断わっても我々が叱られるからとか言っても聞かれないです。日本軍の規律が厳しい事は充分承知しながら必ずお礼にはやってくるのです。チータン（鶏の卵）やヤータン（あひるの卵）油揚げのパンなどぐらいならよろしいが、ちゃんちゅう（支那焼酎）や子豚、アヒルなど生き物を持って来るのには参りました。叱ってやりますと隙を見て部屋の中へ放り込んで逃げて行くのでした。そんな事があったからでしょうか、私達は実に平穏な日々を過ごす事ができました。

それから間もなく私達の部隊は長沙方面へ向かって前進することになりました。その時には何

にも分かりませんでした。この前進は後日の芷江大作戦参加への第一歩であったのです。命令となると少しの余裕も与えられません。前進する準備で多忙でした。部隊の小さい割に持たされる物資は多く、大小の荷物の梱包に忙殺されました。クレオソート丸を与えた少年や老婆のことなど念頭には入らない程多忙であったのです。

そしてその出発の朝でした。梱包した沢山の物資はサンパンに乗せて、私達は清江沿いに行軍をするようでした。私達は前日の夕方までにすべての仕事を終えて朝早く起床しました。太陽はまだ昇らず、朝食をすませた頃、東の空はほのほのと明け始めましたが、街の住民はまだ夢の中のような朝早くに私達の行軍に先立ってあの少年と老婆が私に会いに来て来たのです。私達部隊が移動して行く事が解っていたのですね。

しかしそれが何故分かったのでしょうか、私はいつもこのことに疑問を感じていたのです。我々

日本軍は、我々のような小さな部隊でも防諜をやかましく言いながら、何もかもが筒抜けになっていたように思えてならないのです。後日の事ですが芷江大作戦の時、最前線基地となった衝陽地区が三日、四日に至る大爆撃を受け大打撃を受けました。私たちは曹長以下八人の小部隊で長沙を出発し、本隊を追及中でした。膨大な軍事物資が炎上し、莫大な被害を目の前に致しました。これも防諜に対しての不備であったと耳にしております。さらに終戦時の大詔にしても我々日本軍人よりも支那民衆の方がはるかに早く知っておったと言うことです。

出発の前は何かと慌ただしく、時は無情にも早く過ぎて行くのでした。あの少年と老婆は私の属する部隊が朝早く上流へ向かって出発することを知って、私を見送るために出て来てくれたのです。少年は元気で健康を取り戻しておりました。顔の青白さはまだ残ってはおりましたが、その中に赤味がさし、明るく見えました。少年も老婆も



小ざっぱりとした服装で家鴨を二羽両脇に抱えておりました。私達について行く、連れてってくれと言うのです。言葉はうまく通じませんが心は通じるものです。連れて行くことは勿論、家鴨なぞ受け取ることはできるはずありません。私は今まで覚えたありったけの言葉で「一緒に行くことはできない。行く先々には危険があつて安全はまったくない。私はお前さん方に何もしてやることはできないのだ」といろいろ言うのですが、なかなか分かつてはくれれないのです。否、それは十分分かつているのでしょうか、それでもついて行くという態度を示すのでした。らちがあきません。

私は声を荒げて叱つてやりました。しかし付いて行くと言いはる彼らの顔には真剣さが溢れておりました。同僚たちも同じように、私よりは幾分ましな言葉でいろいろと説得をしてくれました。太陽は昇り、さわやかな朝でありました。出発の準備も完了してよいよ出発です。朝早かったの

ですが、ざわめきが知れたのでしよう、街の住人達も起き出し、ファンズから出て来て私達を見送るかたちになりました。物珍しげにしゃべっています。中にはいつの間にか顔なじみになっていて「シーさん」と声を掛けて来る者もおりました。私達があの大嵐の後、この街に上陸した時には無人であつた街が、今はこんなに人口も戻つておるのです。部隊の者たちにも感深いものがあつたと思います。

いつまでも少年と老婆にかまつてはいられません。私は顔をこわばらして隊列に入りました。点呼の後、号令一下部隊は行進に移りました。私も同じく足踏みから前進し始めました。少し進んでから振り返って見ますと、少年と老婆は履物を手にかけて、砂ぼこりの中後を追つて来るではありませんか。並んで横を歩いている下士官に声を掛けられて、私は列を離れ、肩の銃を隣の同僚に預けると後へ駆け戻りました。せめて一言別れの言

葉を掛けようと思ったからです。

「さよなら、達者でな」ですが、そんな言葉さえ出ませんでした。その他の言葉は出さず唯々大声で「ふしんふしん」とそう言いながら涙が流れ出て仕方ありませんでした。言葉が詰まって声がかすれてしまうのです。少年と老婆は両腕に抱えた家鴨を持って行ってくれと私に差し出すのでした。通じない言葉のもどかしさを身体いっぱいにあらわし、心をこめて言ってくれるのです。少年も老婆も声をあげて泣いていました。私は少年の頭をなげ、老婆の皺だらけの手を握りしめてから隊列へ駆け戻りました。少しの間でしたが隊列を追うのに息が切れました。そして激しい息の中で熱い涙が頬を伝わって落ちました。しばらくしてから振り返るともうかなり後の方をとぼとぼと歩いて来るのです。

行軍のあとですから天気続きの大陸の土が埃となって白い煙のようにもうもうと立っています。少年と老婆、名も知らぬあの二人はどこまで

私達を追って歩き続けたでしょうか。これは、部隊が清江沿いの松蔭県松蔭から前進する朝の忘れざる一コマだったのです。

生命をかけた激しい戦争と言う事の中のクレオソート丸にまつわる感傷的な話ですが、私には忘れられないことです。

あの頃重い銃を担いで歩きまわった大陸の大きな家や学校などの壁や柱、橋などには必ずと言ってよいほど筆太に「日本鬼！ 民族の敵！ 悪魔！」などの日本を敵視する字句が記されています。河の土堤にも同様の立看板さえ建てられていたのです。恐らく学校や教会や日本の隣組のような人の集まる所では、日本人を敵視した教育もなされていたに違いありません。

私達はお互いに敵として憎悪を持って向かい合って来た民族だったのです。妥協のない民族であると思っていました。それなのになった一粒の丸葉がこんな結果を生んだのです。

あとがき

松蔭に上陸して患者収容所を開設する準備も整いました。その時になって薬を包む包装紙が無い事に気付きました。あの暴風雨で流されてしまったのか、一枚もないのです。紙がなくては薬を包むことができません。早急に紙を探せと言うことになったが、後方から送って貰う暇はありません。住人達が逃げて無人になったファンズで探すことになったのです。しかし薬を包めるような良質の白紙はありません。何十軒目でやっと探し出しましたが我々が希望している白紙ではなく黄色でしかも質の悪いおそまつな物でした。たった一枚の紙にも日本の良さを感じたのです。束になって沢山あり、何に使われていたのかは解りませんが、三人で薬室まで運びました。そしてその場に沢山の本がありました。驚くほどの写真が載っていたのです。今私達が見ている「朝日グラフ」か「毎日グラフ」のような写真集でした。写真の技術は素人の私が見ても上手とは言え

ず勿論白黒でピンボケで鮮明ではありませんでした。しかし写真集のような物は実に久しぶりでありましたから興味を持ってページをめくっていましたら、ハッと驚くような写真がありました。その写真と一緒に大きな活字で「日本將軍大角撃墜死！」と印刷されていたのです。

解る範囲で読んで見ますと我々に敵対して非道な軍事行動をやっている天罪で、中国の優秀なる空軍に撃墜された！ とそんな意味の字が載っておりました。

私はまだ召集前内地にいたころ大角海軍大將が台湾から支那戰場視察の途中、南海の高山の中腹にぶつかり亡くなったと言う報道を信じていたのです。ところが敵地の写真画報には前述のような写真を発表しているのです。撃ち落とすと言う飛行機の残骸、運び出された遺体、そして海軍大將の制服制帽の写真など、これは宣伝である、信じたくはないが、この画報が本当かなと思えました。

そしてさらに日本軍の捕虜が支那各地方から送られて重慶にその数三千人、それらの将兵は皆我が軍の比護を受けて明るく生活していると書いてあるのです。さらに戦闘帽をかぶって上衣なしで体操をしている大勢の写真、また日本人は野蛮でこんな迷信を信じているんだと千人針、成田様のお守り、日の丸への寄せ書き、千里行って千里帰るといふ虎の絵など、そんな写真をあざ笑うかのように掲載してあるのです。私はしばらくの間ぼんやりしていました。しかしこれは大発見です。大角海軍大將は我が愛知県出身です。私は一緒にいた同僚に見せて棗室に持ち帰り、部屋の間置に置いていたのですがいつの間になくなってしまいました。

私と一緒にいた上官は「この報道は多少の誇張はあっても、この方が正しい。捕虜が三千人いるとは思えないが多数の捕虜がいることは間違いない。しかしこれはあまり云々しない方がいいぞ」と私に注意をしてくれました。今でもあの時の写

真を思い出すのです。

昭和十六年二月十八日の新聞には、

「大角大將の英靈の凱旋。今日空路羽田へ。陸海協力機片まで収容。南支で殉職した大角大將以下六海軍四軍属の遺骨は海軍機により空路故国の空に向かい、十七日午後四時羽田空港に到着」と報道されました。

「遺骨到着に先立ち、遭難の報とともに派遣された角田光海軍省人事局員、寺崎同軍務局員の両氏は遺骨収容に当たり現地陸軍部隊が万難を押し、海軍部隊に協力した状況を、つぶさに報告を本省へもたらした。

報告によれば搭乗機行方不明の報が伝えられ数分不出して現地陸軍部隊最高指揮官はただちに隸下部隊と陸軍部隊に出動を命じ、悪天候と困難なる地形を冒し現場に到着、黄揚山頂に機体発見するの報あるや陸軍部隊は直ちに現地付近一帯を確保し、山麓付近に幡居中の敵遊撃隊をあまねく撃

破し、殉職全員の遺骨はもとより遺品や機体の破片に至るまで全部收容する事を得た。

黄揚山地方と広東との連絡は曲折せるクリーク以外になく、また黄揚山山頂付近は傾斜四〇度から七〇度極めて峻険な岩山であるため機体発動機などの收容運搬には超人的な苦心を要したが、現地陸海軍地上、水上、空中三者一体の密接な協力により、十四日全部を滞りなく收容する事ができた。

以上は大角峯生海軍大將が遭難された当時の新聞記事であります。

私は終戦後の昭和二十一年に復員しましたが、ある新聞社の編集局次長さんを囲んで雑談会を開催したことがあります。新聞について疑問点があったらと言うことで、先の松蔭県で発見した大角峯生海軍大將遭難の画報の記事のことを率直に質問しました。その時編集局次長さんのはためらいもせず、その画報記事の方が正確です。しかし当

時としては、国としても大事件であったから、か  
るがるしく発表することはできなかったのだ、と  
言う答えでありました。

さて私達部隊は、松蔭の住民達からは大いに親  
しまれ好感を持たれていたことを自負しております。  
そんな松蔭の街を後にして長沙へ向かいました。  
しかし、その長沙での駐留も永い間ではな  
く、ほどなく芷江作戦参加へと前進して行っ  
たのです。

衡陽へ向かって清江をさらに遡って行きました。  
た。それは昭和二十年一月三十日のことでした。  
その時長沙では細かい雪がちらちらと降っていま  
したのに、我々に支給された衣服は新品で、帽子  
には暑さよけのついた帽子、上衣は脇の下には窓  
の空けてある夏物、携帯品の中には多数の蚊取線  
香まであるという夏用の必需品ばかりでありまし  
たので「いよいよ南方行きだぞ」と行先の分から  
ぬまま、そんな事が話題になっていたのです。そ

して出発に先だつて頭髮と指の爪を残しました。この時ばかりはしんみりした気持ちで湧きました。

前駐屯地の松蔭地では爆撃は受けたものの今までは大体が順調でありましたから、あまり不安な気持ちを持ったことはありませんでした。長沙には留守部隊として若干名の人員が残り、部隊が持っている物資は四十漕に近いサンパンに積み込みました。そして船団を組んで清江を衡陽を目指して遡って行ったのです。サンパンからとはいえ、眺める河岸畔の小高い所から上流へ向かっての風景は見事なものでした。

私達はそれまで前進につぐ前進で、大陸での日本軍の強さを信じておりましたから、日の丸の友軍機が飛来して来なくとも、それは南方戦線で活躍中で、こちらまで手が廻らぬのであろうと、気にはなるものの安堵の気持ちもあつたのです。

「神州不滅」「八紘一字」そんな言葉が常に気を引き締めておりました。そんな中での長沙出発

でした。前日の夕暮れまでに準備完了、真夜中の出発でした。

衡陽へ向かつて長沙を出発した二、三日後から清江を遡って行く私達の船団へ空からの爆撃と銃撃は誠に激しいものでした。雨の日でない限り毎日続けられる、その執拗な攻撃を受けてもなすすべなく、一矢を報いることもできず切歯扼腕の毎日であつたのです。飛来する敵機の爆音を耳にする度にただ逃げまどうばかりでした。前進中、行路を陸路に替えたもののその苦難は大して変わらぬが続いておりました。

やっと衡陽へ到着、芷江大作戦参加と言うことになりました。しかし戦いは我に利あらず、宝慶、山間、洞口の山岳地帯の進攻は敗北に次ぐ敗北で、我々の小さな部隊でさえばらばらになり、長沙の留守部隊まで三々五々逃げ帰る無惨さでありました。戦死者もあつたのです。逃げ帰った者達がどうやら集合できたのは何日も後のことでした。

まもなく終戦の大詔を受け、空虚の日が続きました。私達の部隊が武装解除を受けた無念な屈辱の日、昭和二十年十月五日であったのです。さらに私達の部隊長殿は戦犯容疑を受けて拘引されてしまいました。何と言う事であったのでしょうか。そして軍事裁判にかけられて何年もの間、中国大陸に留めおかれたのです。

その隊長殿を残して私達は中支最後の引揚船「高砂丸」で復員しました。事実私達が最後で、私達のあとは戦犯者と特種技術者だけが残っていたと言うことです。

私の場合、上海港から、負けたとは言え、定員の何倍かの乗船、横になることさえできないほどの船詰めで我慢しながら佐世保港外へ到着しました。栄養失調一步手前、足元もおぼつかなく、ふらふらで上陸したのですが、マラリアの後遺症で胃腸を病み何年もの間苦しみました。しかし私は折にふれ、軍隊とはいったい何であったのか、大陸で過ごした日々はなんであったのか、皇軍の一

員として召され果たしてお役に立ったと言えるのであるうか、といつも自問自答しております。

けれども数えてわずか三カ年にも満たない軍隊生活でしたが、私に取って今日までの永い人生の中では、それは五年にも十年にも匹敵する勉強の場であったと思っています。他の場所では到底得る事のできない修業の場であった、と思っております。

常々使われている「戦友」と言う言葉も、軍隊であればこそ、過酷とも思える日々を越えて来たればこそ、と思っています。言うまでもなく戦争はあるべきことではありません。ない方がよいに決まっています。しかし、しかし、であります。

大陸で蒋介石総統の「徳をもって酬いよ」と言う言葉は敗戦の身にとっても、有難く受け賜りましたが、我々が受けて来た数々の事実は、軍隊のない国の惨めさ、負けた者の哀れさ、筆舌では表現できない、身をもって得た哀れなことばかりであったのです。

今日あるこの平和を私は感謝しておるのです。

## 【解 説】

体験記の筆者は、中支派遣軍「呂第六一三六部隊・患者輸送隊第九班」と言う、隊長以下九十二人の衛生部隊であった。

筆者たち初年兵三十三人は、昭和十八年八月、名古屋中部第二部隊に召集され、八月三十一日、大陸へ渡り、漢口で初年兵教育、続いて上海の青葉部隊で衛生兵教育を受けた。原隊は沙陽鎮であったが、命令が変わり北支派遣軍となり、天津第一陸軍病院の指揮下で、天津が根拠地になった。

本来、衛生部隊は師団、連隊の衛生隊、さらに各小隊までに配属されている衛生兵が前線にいて戦闘の間の患者を看ている。そして師団直属の野戦病院と後方の兵站病院、さらには陸軍病院となるが、前線と後方病院間の患者を輸送する部隊と

して、体験者の所属した患者輸送隊第〇班、さらに大きな部隊として患者輸送第〇小隊、第〇患者輸送隊本部、また病院船衛生第〇班などの衛生部隊もある。

これらの部隊の数は、終戦時の記録では、患者輸送隊第〇班が約十班、患者輸送第〇小隊が約百小隊、第〇患者輸送隊本部は約二十本部となっているが、部隊ナンバーを見る限り、また実際には終戦近くの部隊組織の混乱をも考慮すると、これよりも多くの部隊が存在したものと推定される。

体験記筆者は、この患者輸送隊・班の任務として、南京、奉天間の病院列車による患者輸送の任務とか、揚子江や洞庭湖をサンパンを利用しての患者輸送のほか、部隊の所有している担架、衛生材料、さらに軽機関銃、武器、弾薬などの物資を苦力を使って船に積み込み、輸送する任務などを語っている。

そして患者収容所としてファングズを接收、簡単



な病室、炊事場、物干場、河岸の発着場所などの設営を行う傍ら、薬室の準備やら、運び込まれた医笈や医療梱包を解いて、患者収容所開設のための器具・薬品などの整備に多忙となっている状況を描く。

実際に、中国大陆の戦場では前線と後方病院のルートが整備され、一応道路も通じていたこともあって、このような平常業務としての患者輸送の実態であつたろうと思われるが、実際に、ビルマ、ニューギニア、ルソン等の戦線では、幾多の戦記や体験記が語っているように、悲惨な戦闘と転進を強いられた後退戦の中では、患者輸送隊・班そのものの機能や組織は崩壊し、後送する機能もなく、惨憺たる後退街道の現実を呈するに到つたのが、患者輸送の実態であつたろうと思われる。

体験記筆者の部隊は、天津第一陸軍病院の指揮下での任務を解かれ、芷江大作戦参加のため揚子

江を遡り、漢口を経て対岸の岳州から洞庭湖に至っている。

その頃からわが方に制空権はなく、昼の行動は制約され、ほとんど暗くなってからの行動になった。

収容されていた傷病兵の患者も前線から送られて来て、また後方の岳州、漢口方面へ後送するのに、ここで一時休養中に亡くなる兵士などもあつた実情を語っている。

このような大陸の患者輸送の実情の中では、現地住民との交流は大切であろう。戦時中に言われた宣撫工作の一つとしても現地部隊は重要視し、体験記筆者は駐屯中の幾つかのエピソードを語っている。

患者収容所を訪ねて来て、治療を求めて来た一人の老婆と伝染病患者のような子どもに薬などを与え、その後快復してからは、住民は患者収容所に治療を頼みにくる者も多くなり、部隊に対する

住民の信頼は大きくなった、という。

その老婆と少年は律義にも、何かお礼をとすることを言い、部隊は長沙方面へ向かって前進することになったも、家鴨を二羽両脇に抱え、これを持って行ってくれと言う。体験記者は、今でもその交友を懐かしみ、体験記の中で縷々その思いを語っている。

しかし反面、部隊は芷江大作戦参加への第一歩で、この日に出発するという情報を、この老婆と少年はなぜ知ったのであろうか。このことに体験記者はいつも疑問を感じていた、という。

我々は、住民との交流を考えながらも、我々のような小さな部隊でも防諜をやかましく言っており、その老婆と少年という住民に、我々の行動が筒抜けになっていたのではないかと思えた、という。

後日、芷江大作戦の時、最前線基地となった衝陽地区が三日、四日に互る大爆撃を受けた。これも防諜に対しての不備であったということを経験

記者は耳にしていた。また、終戦の大詔にしても我々日本軍人より、支那民衆の方がはるかに早く知っていたと言うことで、抗日思想のあった大陸で、住民と中国軍、八路军との狭間、そこにあった日本軍の苦悩が語られている。

その後、部隊は衡陽へ向かって、さらに清江を遡って行く、それは昭和二十年一月三十日のことであった。その時、長沙では細かい雪がちらちらと降っていたのに、支給された新品の衣服、暑さよけのついた帽子、上衣は夏物、携帯品の中には多数の蚊取線香があり、「いよいよ南方行きだぞ」と、行先の分からぬことが話題になっていた、中国大陸の部隊の姿が描かれている。